埼玉大学紀要 教育学部，69(2)：171－179（2020）

小学校における給食指導方法の特徴
― 教員への聞き取り調査から ―

和井田結佳子　　東京学芸大学大学院学校教育学研究科
河村美穂　　埼玉大学教育学部生活創造講座（家庭科分野）

キーワード：　給食指導、学校給食、小学校、社会性育成、自主性育成、子ども理解

１. 緒言

日本の学校給食は教育の一環として実施されており、ほとんどすべての小学校教員が給食指導を行っている。給食指導とは、「給食の準備、会食、片付けなどの一連の指導を、実際の活動を通して、毎日繰り返し行う教育活動」である[注1]とされており、給食時間中45分間に児童が行う配膳、喫食、歯磨き、片付け等における指導を意味する。

鈴木は、国立教員養成系大学の教育実習に関連する科目と実習の手引きにおいて、十分に給食指導に関する内容が取り扱われていない実態（鈴木 2017）や、初任者研修においても学校給食や給食指導の取り扱いが希薄であること（鈴木 2018）を報告し、給食指導の方法は個々の教員に任されていることを示唆した。実際に、給食指導における発話と動線の分析から、指導の在り方には教員固有のものがあること（原・河村 2014）が報告されている。新保ら（2017）の調査では、59.6%（複数選択式）の学級担任が給食指導で最もよく参考にしていることとして「自分自身が家庭で受けた教育」を選択したとしており、教員自身の体験に基づいた指導が実施されていることを示唆している。

一方で、給食指導の中で教員は偏食指導に最も困難を感じていること（磯部・他 2017）や行き過ぎた偏食指導が児童の内面に与える影響（髙澤・小林 2019）が報告されており、小学校現場の偏食指導には課題が多いと考えられる。

このように、給食指導の方法は個別の教員に委ねられており、その実施には課題も多いと考えられるが、学級運営の一部でもある給食指導方法に関して、教員独自あるいは教員間で大切にされていることは何であるのかは、十分に明らかにされていない。そこで本研究では、小学校教員への聞き取りを通じて得られた内容をもとに、給食指導の具体的な方法とそこにこめられた教員の思いや考えを整理したい。

２.方法

2-1 調査方法

2019年7月、関西地域A小学校教員に聞き取り調査を行った。聞き取り対象教員は、5名（男性1名、女性4名）で担任歴5年未満が2名、5年以上10年未満が1名、10年以上15年未満が2名である（表1）。A小学校はセンター調理方式の給食を実施している学校である。ランチルームはないため、児童は教室で給食を喫食する。聞き取り調査の内容を確認・補足するため、必要に応じてフィールド観察も行った。

表１　対象者の概要

対象教員	O	P	Q[注3]	R[注3]	S
担任経験	5年未満	5年未満	5年以上10年未満	10年以上	10年以上
担当学年	低学年	低学年	高学年	高学年	中学年
聞き取り時間[注2]	5~10分	15~20分	20~30分	20~30分	30~40分

2-2 聞き取り方法と内容

聞き取り調査は夏季休業中の職員室にて、協力可能な教員に声をかける形で実施した。給食指導においては特に偏食指導に課題を抱えやすいことが言われているため、どのような偏食指導を行っているかに注目し、そこにある悩みや指導において心掛けていることを中心に聞き取りを行った。聞き取りの際には、より多くの話が得られるよう、担任経験年数に応じて質問内容を調整した。担任経験５年未満の教員には①給食指導において悩んでいること②ベテランの教員に聞いてみたいこと③何を参考に指導しているのかなどを聞いた。担任経験５年以上の教員に対しては、①給食指導において心がけていること②何を参考に指導しているのか③偏食指導はどのように行っているのか、④給食の時間配分はどうしているかをきいた。聞き取り内容を調査者がその場でメモにとり、それを電子ファイルに書き起こしたものを分析した。

2-3 分析方法

語られた内容について、ひとまとまりの意味をもつ内容を１データとした。（例として、「全員当番、全員運び役とずっと伝えておくことで、当番ではなくても手が空いていたらやろうという自主性が出てくる。」という内容は、それ自体で１データと考えた。）

得られたデータにおいてどのようなことが言われているか、いくつかの視点からカテゴリを生成してデータを分類した。データの分類分析を共同分析者間で協議し繰り返すことで、本研究対象教員間において共通して語られる傾向にある内容が何であるかを検討した。

３.結果と考察

3-1　対象者のデータ数

対象者のデータ数を表２に示す。聞き取り時間などの違いにより、得られたデータ数は最小５最大16までの幅があった。

表２　対象者のデータ数

対象教員	O	P	Q	R	S	計
データ数	6	5	13	10	16	50

3-2　結果１：給食指導方法におけるルール設定と声かけ

給食指導方法についてどのようなことが語られているかに注目したところ、ルール設定に関する内容

と声かけに関する内容があった。さらに詳細に分類すると、ルール設定には大きく2つ、給食時間に関するルールと配膳時の増減に関するルールがあった。また、声かけには全体への声かけと個別児童への声かけの2種類があると考えられた（表3）。

ルール設定のうち、給食時間に関するルールには、給食中の時間配分を設定して準備から片付けまでの給食時間45分間をスムーズにするものや、偏食指導をどの程度行うのかの目安として時間を使うものなどがあった。配膳時の増減に関するルールには、全員に公平に配膳し、なおかつ児童個人にちょうどよい量となるように、盛り付けの際に量の調整を行ったり、配られた給食の量を調整するタイミングを定めたりするものがあった。配膳時の増減に関するルールは経験年数問わず多くの教員によって設定されているものだった。一方で、給食時間に関するルールは担任経験10年以上の教員でよく意識して設定されているものだった。

声かけのうち、全体への声かけは、学級全体に呼びかけて次の行動を促すようなものがみられた。個別児童への声かけは、児童をよく観察し、タイミングを見計らって個別に声をかけるようなものがあった。設定されたルールを大きく外れることのないよう、教員は全体への声かけを行うことでスムーズな学級運営を実現したり、設定されたルールを外れてしまう児童がいるときには、個別に声をかけて様子をうかがうような形がとられていた。声かけは、設定されたルールを運営し補う機能を持つとみられた。

表3　給食指導方法の種類と内容

給食指導方法の種類		語られている内容の例（一部を抜粋）注4
大カテゴリ	小カテゴリ	
ルール設定	給食時間に関するルール	時間（時間配分）を決めている。／ずっと同じ時間で固定する。／偏食指導は時間で切っている。時間が来たら、「ごちそうさま」で食事は終わりにするようにしている。
	配膳時の増減に関するルール	減らしたり増やしたりする時間を作って、食べ切れなそうだったら減らしていいよと伝えて予め減らすようにしている。／給食配膳時、量を確認させて配膳するようにしている。
声かけ	全体への声かけ	「これ食べたら頭よくなるよ、こんな風に体にいいよ」というような声がけで食べに来る子もいる。／「全員当番、全員運び役」とはじめからずっと言い続けている。
	個別児童への声かけ	食べられない時には「一口だけ食べようね」というルールで。

3-2 結果2. 指導方法に込められている思いや考え

次に、ルール設定と児童への声かけについて語られた内容について、そこに込められた教員の思いや考えに注目して読み込んだ。すると、指導に込められている思いや考えとして、児童の社会性・自主性育成に関すること、子ども理解に関することがあると考えられた。そこで、給食指導方法のうち、どのようなことが児童の社会性・自主性育成に関することと子ども理解に関することとして語られていたかを表4にまとめた。

表４　給食指導方法と指導に込められている教員の思いや考え

		指導に込められている教員の思いや考え（抜粋）[注4]			
		社会性・自主性育成に関する内容	数	子ども理解に関する内容	数
ルール設定	給食時間に関するルール	・食べ始める時間〔a〕（12：30 から 12：35 までに食べ始める）を決めている。【R】 ・食べ終わる時間〔b〕（12：55 までに食べ終わる）を決めている。【S】 ・時間を意識させることで、目標をもってもらう。今日はこれを食べたいから、時間までにしっかり食べようと自分で目標を決められるようになる。〔c〕 （他 1 データ）	4	・掃除の時間まで食べているということのないように〔m〕、食べる時間を切る。〔n〕【Q】 ・偏食指導は時間で切っている。〔o〕時間が来たら、「ごちそうさま」で食事は終わりにするようにしている。【R】	2
	配膳時の増減に関するルール	・給食配膳時、量を確認させて配膳する〔d〕ようにしている。「これくらいなら食べられる？〔e〕」常に確認しながら。子どもたちが確認し合う。【S】 ・減らしたり増やしたりする時間を作って、食べ切れなそうだったら減らしていいよと伝えて予め減らす〔f〕ようにしている。【P】	2	・残食の量は子どもの好きなメニューか嫌いなメニューかなどにもよると思うし、子どものその日の体調や活動によって食べる量も変わる。その時その時で変わる。〔p〕【Q】 （他3データ）	4
声かけ	全体への声かけ	・「給食は授業時間だよ〔g〕」と言っている。「考えて動こう〔h〕」【R】 ・「全員当番、全員運び役〔i〕」とずっと伝えておくことで、当番ではなくても手が空いていたらやろうという自主性が出てくる。〔j〕【R】	2	・「これ食べたら頭よくなるよ、こんな風に体にいいよ」というような声がけで食べに来る子もいる。〔q〕【Q】	1
	個別児童への声かけ	・日頃の給食指導はその延長線上にあると考えて、完食は大事だけれども、それよりも「一口食べてみよう」に意味がある〔k〕と考えている。食べもせず、感じもせず残すのと、食べてみて残すのとは違う。食べてみたら美味しいやん、となるかもしれないし、「できることが１つ増えたね〔l〕」と声をかけてあげる。【S】	1	・食べられない時には「一口だけ食べようね〔r〕」というルールで。スプーンのほんの端っこにちょこっとでも、一口としてカウントしてあげたりする。〔s〕【P】 ・保護者の方と面談したときに、給食はどうかきく。〔t〕「食べさせてください」「うちは無理に食べさせなくていいです」などお家のことをきいて、そこに合わせて子どもごとに指導していく。子どもごとに指導は違う。〔u〕【R】 （他1データ）	3

(1) 社会性・自主性育成

教員Rは12：35までに食べ始めること〔表4のa,以下同様〕を重視して給食時間に関するルールを設定しており、そのための声かけとして、配膳準備時間中に「給食は授業時間だよ〔g〕」「考えて動こう〔h〕」「全員当番、全員運び役〔i〕」と全体に伝えている。このルール設定の効果として、12：35までに食べ始めることができれば、児童は食事時間が十分に確保できる。このルールを設定し指導するにあたり、教員が心掛けていることとしては、声かけ「考えて動こう〔h〕」にみられるような児童の社会性や自主性を育成することが考えられる。高学年は係の仕事などで給食準備時間に給食当番が不在となることもあるため、当番の人数が十分でなかったら、状況をみてその場にいる人が自ら当番を務めるという意味で「全員当番、全員運び役〔i〕」という声かけがある。教員Rが「当番ではなくても手が空いていたらやろうという自主性が出てくる〔j〕」と話すように、目標となる時間に向けて、学級の一員である自分がどのように動くのが良いか、周りを見渡して自ら考え動けるような児童になってほしいという願いがありそうだ。

教員Sは12：55までに食べ終えること〔b〕を重視しており、「時間を意識させることで、目標をもってもらう。今日はこれを食べたいから、時間までにしっかり食べようと自分で目標を決められるようになる〔c〕」と話していることから、そのルールには目標をもって食べられるようになってほしい、自分で上手に時間を使えるようになってほしいという自主性育成の意図があると考えられる。

給食時間に関するルールについて、教員Rも教員Sも、4月から児童にしっかり伝えておくこと、時間を固定して動かさないことが重要であるとしており、毎日繰り返される生活時間の一部としての給食時間だからこそ指導できる内容があり、教員はそれを生かした指導を行っていたと考えられる。

配膳時の増減に関するルールをみると、机の上に配膳された食事の量が自分にとって多すぎたら食べる前に食缶に減らしに行ってもよい（食べ切れなそうだったら減らしていいよと伝えて予め減らす〔f〕）としている場合と、ちょうど食べられる量（量を確認させて配膳する〔d〕）を少なめに配膳しておいて、もっと食べられる料理を増やすのはよいとしている場合とがあった。配り係が配膳するため、机の上に配られた食事はその時点ではその日の自分に見合った量とは限らない。前者のルールでは、それを自分に適した量に調整させることが目的である。自分で食べられる量を調整し、全て食べ終わってまだ食べられそうだったらおかわりしてもよいというルールにしている。このルールは、自分が食べられる量を自分で調整できるようになってほしいという考えに基づいたものである。一方で後者は「これくらいなら食べられる？〔e〕」と児童同士で確認しながら配膳することになっている。そのため、児童には食べきれるくらいの少なめの給食が配膳され、もっと食べられる時には後から増やすことができるというルールになっている。また、その際には他の料理を全て食べきっていなくても増やしてよいということにしている。このルールも、自分が食べられる最少量を配膳時に調整し、後から食べられる量を自分で増やしているため、前述のルールと同様に自分が食べられる量を自分で調整できるようになってほしいという考えに基づいていると考えられる。

教員Sは「完食は大事だけれども、それよりも『一口食べてみよう』に意味がある〔k〕」と考えており、そこには、食べ物や作ってくれた人への感謝の気持ちなどの社会性につながる児童の成長を尊重していることがうかがえる。それだけでなく、個別児童への声かけにおいて「できることが１つ増えたね〔l〕」と伝え、給食指導の場を生かした、自己効力感を高めるような声かけを行っている。

それぞれのルールの具体的な内容は教員によって違っていたが、指導には、自ら動ける児童になってほ

しい、目標をもって動ける児童になってほしい、自分にちょうどよい分量を調整できる児童になってほしい、感謝の気持ちを持つことのできる児童になってほしいなどの社会性や自主性を育みたいという願いが込められていた。さらに声かけの内容を見ても、ルールを守らせるための声かけには自主性育成につながる「考えて動こう〔h〕」などの言葉が使われていた。つまり教員は学級ごとのルールを設定することで、児童の社会性や自主性を育成しようとしていた。このことから、給食指導のルール設定は規律を守らせて時間通りに行動させるためのものではなく、設定された時間の目安の中で児童が時間を配分しながら主体的に行動するようにという意図などのもと積極的に提案されるものであったと言える。

⑵ 子ども理解

偏食指導について、担任経験年数５年未満の教員においては「どこまで」指導を行ってよいのか、「どの程度」指導を行ってよいのか悩む傾向がみられた。その足掛かりになることとして、経験豊富な教員らからは、保護者に尋ねて情報を得ること（保護者の方と面談したときに、給食はどうかきく。〔t〕）や、子どもの好きなメニューやその日の状況に応じて指導を行う（残食の量は子どもの好きなメニューか嫌いなメニューかなどにもよると思うし、子どものその日の体調や活動によって食べる量も変わる。その時その時で変わる。〔p〕）ということが聞かれた。このことから、教員は給食指導のために、子どもがどのような家庭背景をもつのか、どのようなメニューが好きなのか等、子ども理解を深めることを心掛けており、同時に子ども理解に基づいた指導を心掛けていると考えられる。新任教員が「どこまで」偏食指導を行ってよいのか悩むことは、子ども理解を深めるきっかけとなっているのかもしれない。

教員Ｑと教員Ｒは偏食指導を時間で切ることにしていた〔n,o〕。「掃除の時間まで食べているということのないように〔m〕」と話していることから、食べきれなくて取り残されることがないように、あるいは食べることができなくても時間という基準でよしとされるように等、児童の精神的な負担を軽減するためのルールであると考えられる。子どもたちは、給食の時間に食べることを強制されると辛い思い出として刻まれてしまい、ときに精神的な障壁を生じる可能性もあると言われている（髙澤・小林 2019）。そのため、本研究対象教員は敏感に子どもたちの気持ちを感じ取り、負担にならないよう留意していたのではないだろうか。

「『これ食べたら頭よくなるよ、こんな風に体にいいよ』というような声がけで食べに来る子もいる〔q〕」という教員Ｑの話においては、子どもたちは食べ物が自分たちの身体にとってどのように役に立つのかを知りたいと思っていることや、身体に良いものは食べてみようと考えていることなど、子どもの事実について気づきを得て子ども理解を深めていると考えられた。

教員Ｐは食べられない子に「一口だけ食べようね〔r〕」と声をかけるが、実際には「スプーンのほんの端っこにちょこっとでも、一口としてカウントしてあげたりする〔s〕」としており、指導に幅をもたせ、子どもの様子を見守ると同時に、その子その子にどこまで挑戦させてよいのかを観察し理解しようとしているのではないかと考えられる。

教員は子ども理解に基づいた指導を心がけており、ルールから外れる児童がいても、すぐに責め立てることはない。「残食の量は子どもの好きなメニューか嫌いなメニューかなどにもよると思うし、子どものその日の体調や活動によって食べる量も変わる。その時その時で変わる。〔p〕」「子どもごとに指導は違う〔u〕」とあることからも、子どもの様子は注意深く観察すると日々違っており、家庭背景もそれぞれであるため、その子その子に応じた指導や対応が求められる。子ども理解に基づいて、ルールの見直しや個

別の対応を工夫し、そういった指導を行うことでますます子ども理解を深めているようだ。本研究対象教員は、給食指導を通じて子ども理解を深め、また、深まった子ども理解に応じて指導の方法や対応の内容を工夫していると考えられた。

４.結語

4-1 本研究でみえたこと

本研究の対象教員が実施する給食指導方法には、次の 3 つの特徴が見出せた。

①給食指導方法について分析すると、大きく 2 つの要素として、ルール設定（給食時間に関するルール・配膳時の増減に関するルール）と声かけ（全体への声かけ・児童個人への声かけ）がみられた。

②給食時の学級ルールを設定することで児童の社会性や自主性を育もうとしており、それに応じた声かけを心がけていた。

③給食指導を通じて、児童の様子や反応をよく観察し実態を捉えることで、児童に関する理解を深めようとしていた。それと同時に、深まった子ども理解に応じて指導の方法や対応の内容を工夫していた。

4-2 本研究の限界と今後の課題

本研究は、調査者の聞き取りメモを主とした分析であった。今後は、教員へのより詳しい聞き取り調査を実施し、社会性・自主性育成の具体的な内容と指導方法を明らかにする必要がある。また、教員は子どものどのような様子を注意深くみているのか、そしてその様子をどう解釈し指導に生かすのかを明確にし、教員が子ども理解を深め指導につなげる過程を検討する必要がある。

注

注 1. 文部科学省「食に関する指導の手引き-第二次改訂版-（平成 31 年 3 月）」の p.223「1　給食指導」より引用.

注 2. 業務の合間に調査を実施したため、教員によって聞き取り時間は異なる.

注 3. 都合上、教員 Q と教員 R への聞き取りは同時に実施した.

注 4. 語られている内容として記載しているものは、調査者がメモに起こした内容であり、音声を記録して書き起こしたものではない.

謝辞

本研究をおこなうにあたり、お忙しい中、快く本研究の聞き取りにご協力くださいました 5 名の先生方に深く感謝申し上げます. また、フィールド調査と研究活動にひとかたならぬご理解とご協力をお示しくださいました A 小学校の校長先生、B 小学校の校長先生、A 小学校の教頭先生・教務の先生・事務職の先生・F 先生、A 小学校の先生方皆様にこの場を借りて拝謝申し上げます.

引用文献

磯部由香, 田中里奈, 平島円（2017）「小学校における給食指導の現状と課題」『三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践』68, pp.143-148

原千尋, 河村美穂（2014）「小学校低学年における給食指導の特徴<教育科学>」『埼玉大学紀要. 教育学部』63(1), pp.47-57

新保みさ，福岡景奈，赤松利恵（2017）「小学校における学級担任による給食指導:—栄養教諭・学校栄養職員と相談している教員の特徴—」『日本健康教育学会誌』25(1), pp.12-20
鈴木洋子（2017）「教員養成系大学における教育実習事前指導等での給食指導の扱い」『次世代教員養成センター研究紀要』3, pp.203-207
鈴木洋子（2018）「小学校初任者研修の手引き等における学校給食・給食指導の扱い」『次世代教員養成センター研究紀要』4, pp.223-227
髙澤光，小林真（2019）「小学校における給食指導の問題点 ： 事例研究と調査研究に基づく小学校での食育に関する提言」『富山大学人間発達科学部紀要』14(1), pp.11-22

（2020年3月31日提出）
（2020年4月10日受理）

Characteristics of Japanese School Lunch Instruction:
Through Interviews with Teachers

WAIDA, Yukako
The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
KAWAMURA, Miho
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Japanese school lunch is considered a part of the school curriculum. Most elementary school teachers provide instructions regarding school lunches. Teacher training curriculums in Japan, however, don't offer methods to teach school lunch; new teachers must deal with lunch time by themselves. This study conducted both observation of school lunches and interviews with five teachers in elementary school to discover instructions methods used during school lunch and teachers' thoughts about school lunch. The key contents of school lunch instruction methods were "lunch time rule setting" and "instruction languages." The teachers' goals included helping the children to think and move independently, and their methods were designed to further this goal. At the same time, teachers made efforts to understand their students and tried to give instruction based on the personality of each child.

Keywords : school lunch instruction, school lunch, elementary school, development of children's self-motivation, understanding of children